

平成 21 年 5 月 30 日現在

研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19760361  
 研究課題名（和文） 少子化社会における安全安心な子育てと  
 健全な子の育ちに配慮した都市環境  
 研究課題名（英文） The Urban Environment For Child Development and Childrearing  
 in The Declining Birth Rate Society  
 研究代表者  
 寺内 義典 (TERAUCHI YOSHINORI)  
 国土館大学・理工学部理工学科・准教授  
 研究者番号：00338295

研究成果の概要：対象地域における街路・公園の現状と、遊びの実態を把握した。子どもの活動範囲は広く、安全の確保には、街路や公園の都市環境整備だけでは困難である。また、街路の好き嫌い意識から、子どもは安全だけを求めていることも示された。ここで作成された遊び場マップを活用し、地域の「まちづくり」活動と一体となり、子どもへの配慮をしていくこと、また、子どもが主体となってまちづくりの担い手となることが重要である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	0	1,300,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,800,000	150,000	1,950,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：土木工学 ・ 交通工学・国土計画

キーワード：地域都市計画、子ども、都市環境

## 1. 研究開始当初の背景

## ①社会的背景

子どもの遊びを観察することで、都市の環境が子どもにとって大きな影響を与えていることがわかる。右に示す「三世代遊び場マップ」をはじめとする諸調査によると、都市化の進展にともなう遊び場の減少、交通事故などの危険の増加、外遊びの減少が見られる。たとえば外遊びの減少は、子どもの成長発達に影響を及ぼしていると言われている。都市が子どもの成長にとって良い環境になっているとは言い難い。

平成 16 年 6 月 4 日閣議決定された「少子化社会大綱」においても、子育てのための安

心安全な環境づくりとしての「子育てバリアフリーなどを推進」や、若者の自立とたくましい子どもの育ちのための「体験を通じ豊かな人間性を育成」といった項目に、道路や公園、都市環境づくりの必要性が指摘されている。少子化の進む現在、子育て・子どもの育ちに配慮した都市整備が可及的速やかに実施されるべきである。

## ②国際的な研究動向

子どもに配慮された都市整備を検討する際に、子ども自身が調査して問題解決に関わるアクションリサーチ手法が、ユネスコの GUIC において提唱されている。GUIC 調査は、極東アジアでの事例がなく、日本での実施が つよく期待されている。特にアクションリサ

一手法は、単なる調査だけでなく、都市環境改善の活動、子どもの育ちの支援と、実質的な活動手法でもある。

### ③国内の動向と研究の着想

これまでの研究代表者による道路に対する好嫌感調査からは、歩車分離された幹線道路に対して嫌悪感を持つ子どもが多数であった。こうした道が通学路として指定されていることは、子どもの健全な育ちにおいて道路環境改善を検討すべきであろう。歩行特性調査で、狹隘道路における子どもの歩行特性が成人と異なることが明らかとなりつつある。これらの調査結果から、改善方策を検討する必要がある。

また、こうした交通安全からのアプローチをすすめるに従って、現在の日本における子どもへの関心の高さと同時に、問題意識の偏りを感じる人が多い。その議論の多くは「安全の追求」である。一方で、「子どもを守るためだからと子どもの一挙一動の全てを監視し、行動を制限するのは健全な育成にとって、弊害も多い」（世田谷 子ども・子育て 初めてのいってきます：世田谷区）との指摘もある。たとえば、健全な育ちを助ける自然の多い環境を整備しようとする一方で、防犯の観点から視線を確保するために公園の植栽を排除するという動きもある。子どもの「安全」と「健全な育ち」がトレードオフの関係となりがちな現状において、都市環境整備を考える必要がある。

## 2. 研究の目的

この研究では、子どもの行動、子どもの遊び、子どもの歩行の3点の調査から、「安全安心な子育て」と「健全な子どもの育ち」の両面において、子どもに配慮された都市環境整備の方策について、まちづくり活動の視点も交えて提言する。

ここで明らかにしたいことは、ひとつは、子どもの街路への意識や行動の調査から、街路整備への子どもの配慮についてとりまとめる。もうひとつは、子どもの行動調査、遊び場の調査から、遊びと環境を把握することである。こうした結果から、具体的には子どもに配慮した都市環境整備、街路環境整備の必要性と整備提案を示す。

## 3. 研究の方法

子どもを取り巻く環境および改善取り組み事例の調査では、まず、広く母親の子育てについての環境を知るために、東京都・神奈川県に在住の母親を対象にインターネットを用いた調査を実施する。さらに対象地区において、都市環境整備・まちづくり・子育て支援等に関わるキーパーソンにヒアリング

を実施する。

対象地域の都市化と環境の変遷では、旧版地図や過去の航空写真を収集し、地域の都市化の変遷をおう。

子どもの行動調査では、街路と公園について、3つの調査を実施する。街路については、①通学路・利用頻度の高い道の調査と、②街路への好き嫌い意識の調査である。①より実態を、②より意識をさぐり、子どもと街路についての基礎情報を得る。③では、この対象地域のまちづくりの成果であるポケットパークも対象として、公園利用を防犯の観点も含めて調査する。

子どもの遊び場調査では、対象地域内の小学校や児童館、地域活動としての研究会（遊びとまち研究会）の協力により、小学生を対象としたヒアリングを実施する。また、この情報から、「四世代遊び場マップ」を作成し、地域の子どもたちを巻き込んだワークショップを開催することで、アクションリサーチ手法を展開する。

## 4. 研究成果

### (1) 子どもを取り巻く環境および改善取り組み事例の調査

東京都・神奈川県に在住の母親に対して、子育て環境に関する意識調査を実施した。図1に示すとおり、居住地選択時点では子育て環境への配慮の優先順位が低い人も多く、そのような層は不満の割合が高まる。対象地域でまちづくりや子育て支援を担うキーパーソンへのヒアリングでも、さらなる配慮の必要性が示された。都市インフラの子育て環境の整備は重要である。

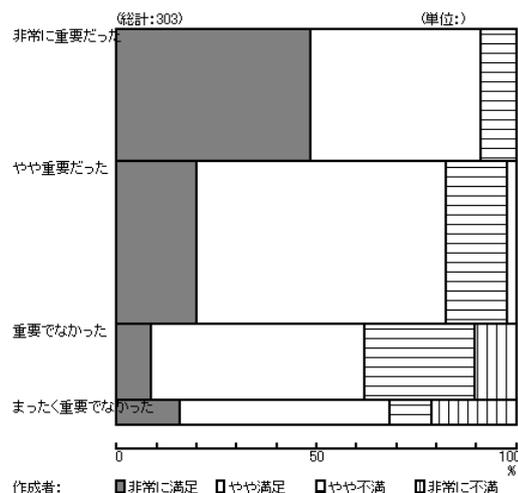


図1 子育て環境についての居住地選択時の重要度と現在の満足度

(2) 対象地域の都市化と環境の変遷

旧版地図や過去の航空写真を収集し、地域の都市化の変遷をおた。人口が増加し、空き地がなくなり、住宅や商業が過密化する様子が把握できた。

(3) 子どもの行動調査

①通学路・利用頻度の高い道の調査

対象地域のM小学校全児童の目的別の利用道路を集計した。全児童の通学路をトレースしたものが図2、よく使う道をトレースしたものが図3である。この比較から、利用頻度の高い道路は通学路に限らないこと、習い事や塾や越境入学の影響により低学年から活動範囲が大きく広がっていることがわかった。通学路に限らず地域の街路には子どもへの配慮が必要である。

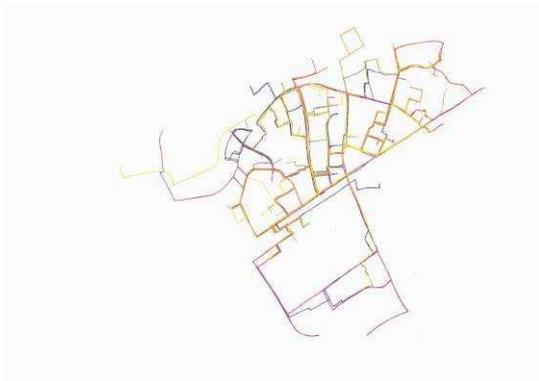


図2 通学路

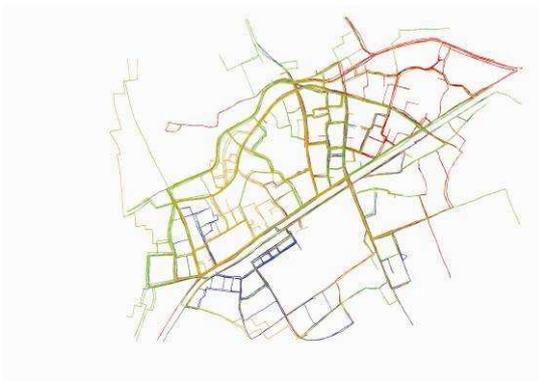


図3 よく使う道

街路への好き嫌い意識

子どもの街路環境調査では、地域の小学生201人を対象として、さまざまな街路の好嫌感をヒアリングした。フリーワードで回答された好き・嫌いの理由を7大分類と中小分類に整理した。嫌いの理由は犯罪などの危険に対する不安が多いが、好きの理由は沿道環境や利用頻度が多い。子どもに配慮した街路の整備を考える上での知見を得た。

好きな理由

嫌いな理由

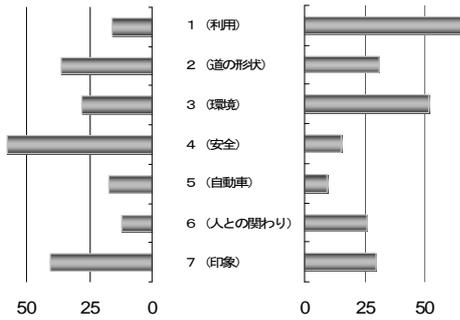


図4 分類別の意見の数

公園・ポケットパークの利用と見守り

対象地域内の40の公園・ポケットパークにおける時間別属性別利用調査を実施した。ここから、日中で大人の公園利用者が存在する時間の割合を「人の目指数」とした。また春日井市での公園安全チェックで用いられる見通しについての7項目の充足数を「見通し指数」とした。調査した公園・ポケットパークについて、プロットしたものを図5に示す。規模により公園に利用は大きく異なり、密集市街地内のポケットパークでは子ども・大人とも利用は少ない。見通しの改善だけでなく、自然監視(大人の見守り)を増やす方策も重要である。

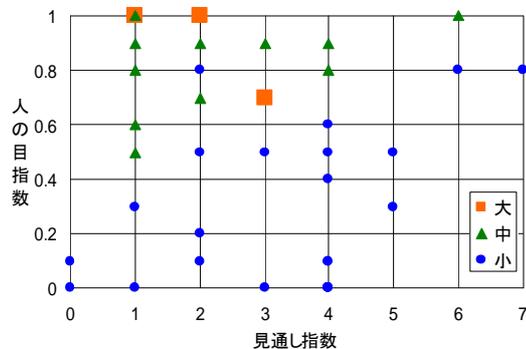


図5 見守り(人の目)と見通しの評価

(4) 子どもの遊び場調査

子どもの遊び場調査

子どもの遊び場調査では、対象地域の4小学校児童へのヒアリング調査を実施した。都市内の自然を利用した遊びを確認した。一方で、防犯対策を遊びに転じたり、携帯ゲームの通信機能を使用するなど、現代都市社会のなかで遊びを創造する子どももみられた。

四世代遊び場マップの作成

遊びのヒアリング結果は、四世代遊び場マップとして発行した。図6に示す。

子どもが主体となる「まち探検」

対象地域のアクションリサーチとして、こ

れを用いた街探検ワークショップを子どもが主体となって開催され、参加者のさまざまな意見を集めることができた。その風景を図7に示す。ワークショップは、遊び場マップを活用した探検まちあるきとして中高生が企画した。主体となった中高生たちが、地域の活動への意欲をさらに高めるきっかけとなった。

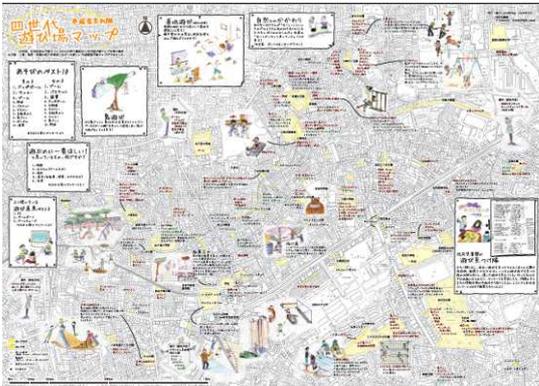


図6 四世代遊び場マップ



図7 ワークショップ風景  
(ゲーム要素を組み込んだ探検まちあるき)



図8 ワークショップ風景  
(マップを使ったパズル)

(5) おわりに  
都市環境整備の枠を越えて、地域の「まちづくり」活動と一体となり、子どもへの配慮をしていくこと、また、子どもが主体となってまちづくりの担い手となることが重要である。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 1件)

寺内義典、樋野公宏、坂本邦宏、橋本成仁、雨宮護、生活道路における移動観測による交通・路上活動の調査法、土木計画学研究発表会講演集、38、(2008)、査読無

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕  
○出願状況(計 0件)

○取得状況(計 0件)

〔その他〕

6. 研究組織  
(1)研究代表者  
寺内 義典 (TERAUCHI YOSHINORI)  
国士舘大学・理工学部理工学科・准教授  
研究者番号：00338295

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
なし

(4)研究協力者  
木下勇 (KINOSHITA ISAMI)  
千葉大学・大学院園芸学研究科・教授  
研究者番号：80251148

吉永真理 (YOSHINAGA MARI)

昭和薬科大学・薬学部・教授  
研究者番号：20384018

樋野公宏 (HINO KIMIHIRO)  
建築研究所・住宅・都市グループ・研究員  
研究者番号：30391600

坂本邦宏 (SAKAMOT KUNIHIRO)  
埼玉大学・工学部建設工学科・准教授  
研究者番号：20282428

橋本成仁 (HAJIMOTO SEIJI)  
岡山大学・大学院環境学研究科・准教授  
研究者番号：80291318